

彙報

大禮の盛儀

今上天皇陛下曩に寶祚を紹ぎ給ひ、去秋十一月を以て即位の大典を京都皇宮に擧げ給へり。其月七日神器を奉じて京都皇宮に着御あり。十日即位式を、十四日大嘗祭を行はせ給ひ、超ひて十六七の兩日大饗を臣僚に賜ひ、尋で、神宮並に山陵の御親謁あり。其間特に贈位、養老、賑恤、恩赦の仁令を發し給ひ、廿七日御發軔、車駕東京宮城に還幸あらせられたり。七日京都御着登以來好晴打續き一代の盛儀滞りなく終了遊ばされしは上下の慶祝して措かざるまゝなり。

文科大學大典奉祝展覽會

京都文科大學にては大典奉祝の爲め、十一月十二、三兩日、其の新築の陳列館に歴史、地理、考古、土俗、言語等の諸學科に渉れる圖書文書並に遺物類を陳列して一般の縦覽に供せり。

陳列室は同館階上階下の七室を以て之に當て、階上の第一室は皇室の御文事に關するものを始め主として圖書類、同第二第三の兩室は國史に關する記録、文書、書籍類、第四室は印度及び印度關係の佛像、經典類、階下の第五室は新領土の土俗品、考古學上の遺物、第六室は主として東洋史に關する遺物類、第七室は西洋史關係のイヅプト、バビロニア等の諸遺物を收め、別に陳列館の南隣

なる尊儀室内に設けたる特別接待室の一部に日本考古學に關する資料を陳列せり。

今是等陳列品中特に注目すべき品目を列擧すれば、第一室に於ては、慶長勅版類、清原家進講本、藤芥舉記(中院通行日記)、伊勢物語開書、眞本貞觀政要等の皇室の御文事に關するもの、及び五體清文鑑、和蘭文字略考、滿洲語學書、同鶴佛典、乾坤辨說紅毛天地二圖資説等外國語學に關するもの其他外國交通關係資料として耶穌會年報書類、チチング宛蘭文書簡集、ハリス書柬、相國寺心華院書翰屏風模寫本等を陳列せり。第二室第三室は主として國史に關する陳列品あり即第二室には平安朝時代記録原本として兵範記の京都文科大學及び近衛公爵家の所藏本を、鎌倉時代記録原本として深心院關白記、室町時代記録原本として建内記及び滿濟准后日記を陳列し、其他には近衛家所領目錄、日本古圖、京都古圖、大和國山邊郡乙木莊坪附圖等あり。第三室には、東南亞細亞古地圖、長崎圖、蝦夷圖等をはじめ、本多利明の書簡、著述及び其關係書類、馬場正通遺書、享保年間仕切書、塙保己一書簡集、立原軒軒筆錄、小宮山楓軒筆錄、馬場貞由、秋月胤永、肝付兼武著、朝鮮記録及び文書、元良博士研究資料等を陳列せり。

第四室に於ては金石造像類に、印度の遺物として趨多式釋迦像を初め同地佛施迦耶拔掘の西曆八世紀前後の不空觀音、釋迦の二大石像あり、支那の部は六朝北燕太平二年より唐初咸亨元年に亘る二百餘年間の銘ある造像三十軀にして、よく當時に於ける造像の様式並に其の變遷を知り得べく、就中西魏大統十七年造石面石佛の如き、隋大業二年の彭子猷造像、唐武德六年楊文幹造像

像の如きは最も注意すべき遺品也。西藏造像にては尼巴爾式銅像十一面千手觀音像倣を呈し、出品の日本造像は推古朝のものと思はれ、毫塵に大部寸主兒中知名六子母分誓願敬造像の刻銘あり、其他明代の陶製子安觀音の如き、又壁間に掲げられたる多くの西藏の佛詣拓本の如き何れも貴重なる遺品なりとす。

經典類には印度西藏に於ける梵文入楞伽經、三昧王經、十住經、儀軌集初め各種の寫本對譯版本數十點、支那に於ては寫經に北魏永興六年の大雲無相經、西魏大統十六年の大般涅槃經等敦煌出土のもの九點、北宋より明嘉靖に至る各種經の版本、朝鮮の高麗代の寫本及び版本數種、日本の部は白鳳十五年僧寶林寫金剛場毘羅尼經、和銅五年寫大般若經より天平、天平寶字、神護景雲等主として上代寫經の優品を集めたり。

第五室は壁間に多くの地圖を掲げて歐洲戰亂の各方面に亘る戰局地理を明にし、其一部には南洋各地の地理土俗學上の寫真を示し、室の西半には南洋新占領地のサイパン、ヤップ、バラオ、テュツク、ボネ、クサエ、ツヤリニューイト諸島に於ける地理、土俗、考古學上の標本、臺灣、樺太の遺物及び本邦各地土人及び家屋の模型を陳列し、東半には朝鮮、滿洲にて採集せる考古學上の遺物を收めたり。其の南洋の各種土俗品は多くの注意を惹き、又朝鮮の部に於ては新羅時代の各種土器、高麗時代の水瓶、同冠裝飾金具、間島東古城子の文字瓦等は雲頭城蒲鮮高奴城址より發見されし金代の文字瓦、天泰八年の銅版と共に注目すべきものにて、滿洲の部に於ては各地發見の陶器類、營城子東方牧城隴古墳發見の漢代漆畫斷片、遼陽城西發見の日本刀の如き何れも興味あるもの也。

第六室の東洋史に關する遺物にて重なるものは金器、古鏡、

出土品、古玉器類、陶器類なり。金器には鼎彝類に商斝鼎、商祖戊鼎、甬子執戈鼎、周不忌敦蓋、周頌敦蓋、周子叔孫簋、周無期敦、三代虎紋鼎等の精品あり、其の以外のものには秦權、漢銅器、漢銅量、銅尺等の度量衡、秦代の虎符の最も精巧なるもの、車具帶劍等古代の生活の研究資料より近く元至元鈔板、明鐵券、清職圖銅板等に及び、武器には金象嵌ある周刎才、塗金短兵、劍、漢永元七年魏正始二年同五年等の銘ある弩機等を陳列せり。鏡は漢建安十年鏡、十四年鏡、某年鏡、吳黃龍元年鏡、王氏薤雲鏡、金承安三年鏡等時代考定の標準となるべきものより、漢仙人鳥獸鏡、六朝師子鏡、漢獸首鏡、唐真子飛霜鏡等の優秀品を集め、金元鏡まで八十八面、外に朝鮮鏡十一面あり。玉器には殷代より漢代に至るもの三十餘種、殷虛出土品には犀象の骨に彫刻せる器具、貝器、殷の帝王名の存する龜版卜文類等當時の文化を窺ひ得べき貴重なる資料あり、陶器類には祭器類に三代の款識ある器物より、漢永元六年の朱書あるもの、當代の建築の様式を知るべき三國の陶器、サラセン紋様の唐代皿等、明器類にては四神の象を現はせる漢代甕、有釉の漢甕、陶製家屋倉廩等漢より六朝に亘る遺品多く、土偶類には駱駝の如き馬、騎馬人物の如き優品あり、十二支神像の如きは珍とすべく、殊に其の魁頭の如きはヤリシヤのそれに頗る類似し、又音樂を奏せる天人は我が法隆寺金堂天蓋の天人と軌を一にし頗る興味深きもの也、其他骨器類及び上代に於ける貨幣の發達を知り得べき資料及び漢代より六朝に至る建築、墳墓に使用せる磚、就中漢竟寧元年のもの、内蒙古歸化城發見の漢古語磚類、漢影象磚の如き其

の著しきものにて、又密間に掲げたる西洋人朝世靈の滿人游獵圖、猿猴圖と朝鮮、龍岡漢粘蟬古碑、同昌臺新羅古碑、滿洲輯安縣丸都碑、旅順黃金山鴻臚井刻石、武周康居士繕經記殘碑等の最近發見金石文の拓本も研究上裨益する所少なからざるもの也。

第七室は、第一イジプトの遺物を同史の各時代別に従ひ之を王朝以前・古帝國、中帝國、新帝國、復古期、ギリシア、ローマ時代に區別して陳列せり。其の王朝以前のパレット類、中帝國時代に於けるテーベの傍テル、エル、バハリの第十一王朝メンツヘテツプ三世の神靈殿より發見されたる木製船、人形、壺、弓矢等の各種遺物、及び上イジプトのアスアンにて十二王朝頃に作られし形象文字の小碑、新帝國時代のテル、エル、バハリ發見の彩色繪木棺片、珠數玉類、復古時代の極彩色模樣織物片及び各時代のウシヤブチ類の如きは、ギリシア、ローマ時代の祭祀用土偶類、ギリシア彩色繪土器破片、象牙細工等と共に最も注目すべき遺物なり。二のイタリヤに於けるギリシア、ローマ時代の遺物には土製燈器類、オルベイト發見イタリア黒燒土器の如き、ホンペイ壁畫斷片、ギリシアの貨幣と共に擧ぐべく、第三のバビロニア文書は本邦に初めて發來されしものに係り、ニツブル發見の古バビロニア文書五十七個、古バビロニア帝國第一王朝代の文書、カツシート朝時代の文書ダリウス時代のバビロニア文書、ケヒト文字文書等各一個の多數に上り、其のダリウス時代のものには「バビロニア王、世界の君ダリウス第十六年」の紀年現はれたるもの也、メキシコの遺物は重に石器類なるが石偶頭部、石剃刀等の精品あり、南米秘露地方に古く發達せしインカ帝國の諸遺物は海外に於ても多く比を見ざる

珍奇なるものにかゝる。

別に整間にヘルトヘンボックス城取圖、サムマルタン塞攻圖の西曆十七世紀の洋刻鋳版畫の精巧なるものを掲げたり。

尊模堂に於ける日本考古學に關する陳列品中に於ては、和泉及び河内發見の銅鐸、山城、大和、近江、諸國發見の刀柄頭、大和發見の刀柄裝飾殘缺及び竹櫛、山城松尾村發見の香葉其他の馬具、大和山口千塚發見の蓋杯附高杯、近江鏡山發見の陶馬、同礫、皇城使用の瓦類、殊に平安宮の碧疏瓦、同文字及び大和青木麿寺の延喜六年の文字瓦等注意すべきものにて、其の織田幾次郎氏寄贈にかゝる多くの石器時代及び古墳時代の遺物は蒐集の周到豊富の點より研究上に裨益する大なるものと云ふべき也。

兩日に亘り滯洛中の貴紳を初め一般參觀者數千に上り、學内關係諸教官等説明の任に當られたり。

宸翰展拜會

宸翰展拜會は御即位記念として京都府主催の下に大正四年十一月一日より十二月七日まで京都府立圖書館に於て公開せられ後白河天皇宸翰より明治天皇宸翰に至る百七十餘點を陳列せり。其中主なるものは、後白河天皇御消息、後嵯峨天皇勅願文、後深草天皇 後宇多天皇御消息、伏見天皇讀漢書詩、後宇多天皇遺告文、同願誦文、花園天皇御消息、後醍醐天皇勅書、光嚴天皇、後光嚴、後小松天皇各御消息及び後柏原、後土御門、後奈良、正親町、後陽成、後水尾、後伏見、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格天皇の御懷紙、御短冊等なり。

皇室關係大阪郷土資料陳列

大阪府に於ては御大典奉祝記念のため府下に存する皇室關係資料を蒐集せんとし、今井府立圖書館長、吉田司書等各方面に採訪せし結果、千數百點を得、これを大阪博物院に陳列して十月卅一日より十一月廿日まで展覽に供したり。其重なるものは文書記録に於ては住吉神社文書(繪旨、院宣、口宣案)、水無瀬宮文書(後鳥羽天皇宸翰手印置文、同天皇尊影、後村上、後光嚴天皇繪旨)、觀心寺文書(觀心寺勘錄緣起資財帳、古文書集十卷)、金剛寺文書(繪旨、龜鏡)、久米田寺文書(楠家文書、護良親王合旨、久米用文書)、勝尾寺文書(護良親王合旨)、開口神社文書(大寺緣起、緣起天覽狀)、を初め松尾寺文書として繪旨二卷あり、其他徽福寺文書、泉穴師神社文書、寶鏡寺宮理豐内親王御筆後白河法皇、待賢門院御影(慈恩寺)、等なり。調度器物に於ては後村上天皇御寄附金銅花瓶(觀心寺)同天皇御寄附琵琶並笙(金剛寺)聖德太子扇面經(四天王寺)明治天皇御禊(津村別院)明治天皇小簡立(難波別院)禁裡御着物御用札(今宮神社)行在所掛札、靈元天皇御冠(土師神社)等ありき。

大藏會の開催

聖帝御即位の盛典に際して佛教各宗派は聯合して大藏經及び續大藏經を奉獻したこのことであるが、別に京都佛教各宗學校も奉祝の爲に聯合して大藏會なるものを組織し、古來法經の傳譯弘布に力を致した三藏の偉績を表彰し、一面には法寶尊重の美風を振興して徳教維持の資けとせやうといふので、十一月廿一、廿二の

兩日眞宗大谷大學に其の第一回を開催した。其の次第は奉祝の法式について講演を催し、且つ多くの佛典を陳列して一般の縦覽にまかせたのであつた。陳列品は有名なものは廣く諸方に求めて一、宸筆、二、支那、高麗、日本版の大藏經各種の標本、三、單行版經、四、寫經、五、經板經帙等、六、拓本、七、肖像墨蹟、八、梵、運、藏、滿諸大藏の八部に分けてあつたが、各部とも精選せられた品で充ち、總點數四百四十一に及んで居つた。但だ慾目には板式の區別などを今少しく嚴密にしたらばと思ふ節もないではなかつたし、また我等の知れる限りでも、此の會の陳列としては逸せられて居ると思ふものがないでもなかつた。しかしそれは固より望蜀の沙汰にすぎないのでかく迄豊富に貴珍な品を陳列して有志の人に満足を興へたのは佛教學界近來の美事であると共に、第一回大藏會の成功を祝せればならぬ。

陳列品の目錄は別に同會より頒たれたものがあるから一切茲には省き、たゞ講演の題と演者とを紹介するに止めて置く。

廿一日の部

房山石經に就いて

文學博士 内藤虎次郎氏

支那及び高麗に於る刻經沿革

妻木 直良氏

大藏會の徽章(カニシカ王寶幣)に就いて

文學士 羽溪 了諦氏

廿二日の部

亡友楊仁山居士を憶ふ

文學博士 南條 文雄氏

忘れられたる大藏經に對する功勞者

文學士 蘭田 宗惠氏

大藏會陳列管見

文學士 佐賀 東周氏

佐久間象山記念展覽會

佐久間象山記念展覽會は象山遭難記念碑の落成と共に象山先生遺跡表彰會主催の下に大正四年十二月四日京都帝國大學學生集會場に於て開かれたり。陳列品は象山の書翰、詩文、稿本及び其所持品等百餘點にして就中斬奸狀、遭難當時の傷口檢案書、遭難の當時着用せし馬具、象山遺愛の琴等觀者の注意を惹けり。尙午後は増澤淑氏「象山先生畧傳」、青柳工學博士「科學者としての象山先生」、新村文學博士「醫學者としての象山先生」富本仲氏「蘭法醫としての象山先生」、武田工學博士「砲術家としての象山先生」、加藤弘之博士「識見家としての象山先生」等の講演ありたり。

史學研究會

例會 大正四年十月十六日(土曜)開催、會員文學士内田寛一君の「岡山縣大島村貝塚と其人骨」及び同文學士今西龍君の「眞蕃郡考」の兩講演ありたり。今西學士の講演内容は本誌研究欄に詳かなれば、こゝにはその紹介を畧し、左に内田學士講演の大要を掲げん。本講演は大正四年六月下旬出張調査したる岡山縣大島村貝塚特に其處より發掘したる人骨につきて概説せるものなり。モールズ氏が「大森介孺の研究以來貝塚研究の事漸く進み近時の發達は實に顯著なるものあるが、其の製作者若くは當代の人類が如何なる種族なりしかといふ問題は、會て學者間の大論戰となりしにも拘らず容易に決すべくも見えず、蓋し之には種々の理由もあるべし。然しながら歐洲に於て有史前の種族研究が人骨に基き又其遺物遺跡に依れるに似ず我國に於てはかゝる人骨に乏し

きが故に主として遺物遺跡に俟てる事は此の問題の解決をして遲延せしむる重大なる原因にはあらざるか。然りといへども從來我國の貝塚中より人骨を發掘せし事なきにはあらざるなり。モールズ氏が「大森貝塚の貝層中より發見せし骨片を始めとして江見氏佐々木飯島兩氏八木氏マンロー氏水谷氏大野氏高島氏等によりて貝塚より發見されし骨片の數は之を歐洲に於て一頭蓋によりて何々スミとして人種名の命ぜらるゝに比すれば強ち少數とはいふべからず。然し乍ら此等貝塚より發見せられたる骨片に對して懷疑者多く其貝塚時代のものと認めらるゝものば頭骨を缺き頭骨あるものは大抵否認せられたり。貝塚より出でたるによつて直に之を貝塚時代住民の人骨と信ずるは輕率なるべく又實際發掘せしもの中に明かに近時の人骨ありしならんが少くとも其幾部に對しては學者間に信疑兩派ありて論戰を見たりき。

氏は之より進んで、大島村の貝塚より發掘したる完備せる人骨一軀と頭骨を缺ける人骨一軀とに就いては、其人骨と貝塚との關係を推理する爲めに此貝塚發見の由來、貝塚の位置、附近の地形及び地質地形上の變化より更に貝塚の地形地質を説き貝塚の境域と發掘地との關係を述べて後發掘地に於ける層位層厚及其包含物と人骨の位置、存在の状態等との關係より貝塚生成の時代と人骨との密接なる關係あるを斷じ、轉じて人骨其もの特に頭骨に於ては其揭示數及顔面骨相、脛骨に於ては其揭示數等によりて其貝塚時代の人骨なるべきを論じ、それより此貝塚人骨が如何なる人種なるべきかを述べんが爲めに之に關する從來の學說を列擧し之を

分類して簡單なる批評を試み人骨と共に發掘したる遺物をも參考してアイヌ式なる所もあれど亦一概に論ずる事は危険なりとし、實際先住民につきても各方面より各種の民族の移入を想像し得るを以て果して何れの民族に最も類似點を多く見出すかを研究せざるべからずとなし、此の故に同具塚の精査を緊急の必要となす事を以て論結せり。最後に氏は大島村の對岸なる神島外村より發見したりといふ頭骨及土器に就きて附言したり。而して此具塚にて完備せる人骨を發掘したのは即氏を以て最初となすべきが具塚一部の所有者松枝果の發掘に係る頭骨五個の中四個は原形の推さるものにして氏が八月下旬再び同地を訪問して持來したる二個の頭骨の如きは發掘のまゝ殆ど完全に原形を保てり此等數軀の人骨は即氏が材料となせるものなり。

右講演に際しては、氏が實地發掘せる人骨及び寫眞を陳列して縦覽に供せり。

第八回總會 去る十二月五日午後一時半より京都帝國大學々生集會場に於て開催、左の三博士の講演ありたり。

一、朝鮮に於ける日鮮關係史料

- 會員文學博士 三浦 周行氏
- 會員文學博士 內藤虎次郎氏
- 會員文學博士 藤井健次郎氏

一、薩兒^{カルフ}濟山の戰
一、唯物史觀と歴史法
三浦博士は先づ朝鮮の歴史思想、歴史編纂の狀況より説き始めて、最近渡鮮調査されたる多くの史料中直接間接彼我の史的關係を知り得べき實録以下各種の日記、雜史、小説、文集等の概要を説き、次に金石文に及び、其の内に我が國に關する重要にして而

かも正確なる記事の多きを明にし、殊に室町時代以降の日鮮關係は是等の史料に據りて從來の面目を改むべきものあるを説かれ、

内藤博士は先づ薩兒濟山の戰が清朝史の上に又一般戰術の研究上に價値ある所以を述べ、滿洲の起源より戰前に於ける明、滿の接觸狀態、戰の起因、明の王在普の記する所に據る軍の數の八萬八千五百五十四名なりし事、朝鮮の記録により其の明軍に加はれる援兵の一萬三千餘なりし事、之に對し滿洲軍の編成を細説し、明軍が一は撫順方面より、一は清河城より、一は開原鐵峯方面より他は迂回して鳳凰城寬甸より四軍に別ち進める作戰、而も此の計畫が撫順方面より進める杜松の軍の失敗より、畫餅に歸し、天明四年三月一日より五日に亘る戰鬪にて、太祖の爲に全く擊破されし經過を博士が嘗て實地踏査せる所に基き興味深く論じ、其の戰果に及び、最後に戰術上より兩軍の執りし行動を批判され、藤井博士は十九世紀の中葉より歴史哲學なる問題の論議せらるゝに至れる動機より説き起し、唯物史觀の成立せる徑路と、之を大成せるマルクスの主張を紹介し、其の説の據りて來れる思想の根源を述べ、一々批判を加へ、進んで歴史法なるものが自然科學に於けるが如く一の法として成立の可能なるを詳論し、而も「自然科學は因果科學なるが、歴史法が成立するならば手段目的の連續にて、そこに目的論科學が成立するなり」と結ばれたり。

聽講者百名に近く、閉會せるは六時なりき。

讀 史 會

例會 十月四日午後六時、京都帝國大學學生集會場に於て開く。

出席者は、三浦、喜田兩博士、清原、魚澄、中村三學士、粟野、今村、神浦、松野、下川、古田、辰馬、牧、淺若及梅原の諸君なり。新入會員の紹介終りて後、清原學士は本會創立の由來經過を述べ、本學年最初の集會の事にて、例によつて各會員が夏季休暇中に於ける研究若しくは見聞の一端を發表せり。先づ喜田博士は多武峰の墳墓につきて多武峰の墳墓が藤原鎌足なりや不比等なりやに就ては從來異說あれども鎌足とするを正當とすべしとて、本居翁、古

事類苑、谷井氏、増田氏等の説を反駁して自己の所見を明かにし

不比等のそれは公卿補任の頭注に見ゆる佐保山推岡の火葬地なるべしと結ばれ。清原學士は「西洋史論」について、ラヴィスの所

論の特徴を説き、史實の考證も必要なれども、抽象的史論亦決して輕々視すべからざるを論じて我國史界にもかかる試みの出現せ

ん事を期待し。粟野君は熊野信仰の發達を述べ平安朝中期より發達せる熊野信仰は我國中世史上に於て公武僧侶の別なく、其影響

する斯極めて汎く、殊に近畿以東は奥羽にまで及べると反し以て西は僅かに薩摩琉球に見るのみなりと論じ、其祭神、創説、神職等

につきて説くところあり。魚澄學士は高野山官省符莊につきて、官省符莊の意義を説明し、高野山文書に見ゆる天野社の官省符

莊の起原、沿革を述べ、中村學士は醜剛三寶院印可印信につきて印可、印信の意義を説き、今夏三寶院文書に於て調査せる印可印

信千二百餘通に就て其様式を論じ、今村君は報德文庫を見て二宮尊徳の救貧事業は制限的のものなりとて、西洋諸象の學說と比

較研究し、これと一致するを説明し、被救恤者を定むる投票に關して其方法の得失を述べ、神浦君は江州坂田郡法性村福田寺の沿

革を述べ、後鳥羽天皇の歸依ありし事及淺野家との關係少からざりし事に及び、松野君は式文につきて、本願寺及佛光寺に所藏せる、式文に就て異同を對照して、その何れが第一なるべきやに論及し、且親鸞上人研究の一史料なるべきを附言し、右終りて三浦博士は但馬國溫泉寺、圓通寺の文書調査の結果を語り、且隱居制度研究の一斑を述べられ、十時過散會せり。

例會 十月廿六日午後六時半學生集會場に於て開會す。出席者は

内田博士及び清原、江馬、魚澄、中村の諸學士、粟野、今村、神浦、松野、辰馬、古田、淺若、下川、牧、淺原の諸君なり。

先づ魚澄學士は高野山領神野眞國庄所領關係に就て高野山領紀伊國神野眞國二庄の沿革を述べ、領主、領家本家の複雑なる關係を説き、此庄園が同時に二個の本家を有し、領家職は一時藤原家より

高天神護寺に寄進せられしも解文覺の配流ありてよりまた舊に復したる事情を述べ、次に江馬學士は、江戸時代に於ける風俗と其

源泉について、江戸時代の風俗中特に髮風(男子髻、女子髻)袴、白粉、被物、衣服、染物等の由來變遷を述べ、民間の風俗、殊に下流視

されし俳優、舞妓、藝人の風俗は流行の源泉とされる事等を述べ、内田教授は、徳川時代の書物に見ゆる風俗の、どの位の程度まで現

存し、又現今の風俗の、どの位まで其當時に淵源せるかを研究する事の興味あるべきを説き、更に翻りて流行の心理より見て、

世人の注意を惹くもの、自分より區別あるもの、即目に付き易きものが流行の中心となるものに非るか、而して目に付き易きとは

都會の發達を意味するものなりと説かる。次に粟野君は、本邦中世の旅宿、殊に御師、宿坊、間に就きて先づ「歴史地理」掲載大森金

五郎氏の「交通機關として旅館の發達」の概要を紹介し、其宗教と旅宿、商業と旅宿との關係を看過せるが如きを指摘し、更に進みて御師の起原及職掌より説き、御師考證、明德記、紀伊續風土記等を引き御師は必ずしも伊勢に限りしものに非ず、熊野其他にもありしものなりと論及せり。時既に消燈の刻に近づきしを以て後半の講演を次回に譲る事とし十時半散會す。

例會 十二月一日午後六時學生集會場に於て開催、出席者は三浦教授、喜田、今西兩講師及び本庄、魚澄、中村三學士、神浦、松野、辰馬、下川、古田、淺若の諸君とす。

劈頭先づ最近發行の「京都史蹟案内」を會員に頒ち、次で朝鮮より歸學せられし三浦教授の朝鮮旅行談あり。教授は滞在豫定期日の大部分を京城に於て費やされたることより、其奎章閣に於て調査せられし李朝實錄が日韓關係史研究上、絶好無二の史料を提供し日本側の史料と比較して大に見るべきものあるを實例を引てこれを説せられ、應永廿六年の外寇の如きも從來の所説と大に異なるものあるを發見せりと説かれ、實錄の外に承政院日記、日省錄、繪經、曆錄、公文、賑恤廳日記等の根本史料として價值あることより奉議堂の調査、淺見氏の藏書及び購書の事に及ばれ、更に原の組織、朝鮮の社會制度、朝鮮人の教育等についての調査の結果を説明せられ、朝鮮地方に於ては主として新羅の舊都慶州の王陵、各地の山城、市場等の觀察、地方の兩班吏族の訪問についての所見を披露せられたり。十時半散會。

第六回創立紀念大會 十二月十一日、學生集會場に於て開催、會場と定められたる二階大廣間の西半を史料陳列に宛て、正午を以

て開場、午後一時辰馬君の開會の辭に次で講演に移り、先づ松野君は修驗者に就て役小角に起原せる修驗者はいつしが山伏と混同し來り堀河天皇の頃附聖賢、修驗道を中興せることより、修驗者は僧にも非ず俗にも非ず肉食妻帯をなし、惡覺降服のためなりと稱して帶刀し、秀吉之を誅許し徳川家齊之を禁せんとして果さず

聖護院宮が大峰入山の時の如き諸國より來觀するもの極めて多く京洛の巷ために賑ひたるを説き、今村君は安積良齋の生涯及其著書について、人類の事業を社會的現象なりとして之を研究する事が史學の目的たるならば個人の研究亦必要の事に屬すと説き出して良齋の生涯に就て最も注意すべきは彼の妻より離縁されたる事なるべしとて彼の經歷及抱負を詳述する所あり。中村學士は中世の村落に就て論じ我國中世の村落の特色は、その發達が莊園制度に伴へるならんとて、其一例として江州蒲生郡島村を舉げ、島村は既に早くより阿彌院寺の莊園となりしものなるが、百姓等の間には相當自治の精神存し榮護を重じたるが如く、其職業は農業の外に漁業も行はれ「供御江利」を生じ、特に注意すべきは村民間の組合即講又は座が一種の金融機關たりと事を説き、魚澄文學士は足利義政の生涯について、東山時代は足利氏の衰微の第一歩にして美術の發達の如き望むべからず、幕府の威勢全く地に墮ち盜賊所在に蜂起し徳政一揆は絶ゆる時なく神人僧侶橫暴を極めし時に義政は獨り歡樂に耽りたるが、彼は決して暗君に非ずして風流の念に富み且頗る器用なりしも、家庭の紊亂は彼をして自暴自棄に陥らしめ、夫人富子の英明は彼をして其明智を暗ふせしが如しと説き、木宮文學士は北條時宗の信仰について、時宗の經宗に對す

る信仰を述べんとするには先づ時頼が熱烈なる佛教信者にして道元に就て學びし事を注意すべしとて、この父の子たる時宗亦頗る禪宗に歸依し元寇後後人心恟々たる時に當り外征の計畫を敢てし僧侶を入宋せしめし事の如き彼の信仰の凡ならざるを窺ふべしと述べたり。右終りて説明に移り、三浦博士及び今西文學士の陳列品に對する説明ありて休憩、會員一同記念攝影を行へる後、川島文學士はウヰリアム、アダムスを憶ふと題して、我國が世界的地歩を占むるに至りし時にあたりて、極東の日本と極西の英國とを結び付けし最初の偉人なるウヰリアム、アダムスを憶はざるを得ずと説き、彼は一五六四年チンダムスに生れ長じて航海事業に従ひ一五九八年ゾイテル灣口を出てもより風波と争ひつゝ、偶然の結果一六〇〇年我國に漂流し爾來我國に留住して海外貿易のために盡す所あり、望郷の念を抱きながら肥前平戸に没したるを述べ、三浦博士は朝鮮史料より見たる應永の外寇について、從來の史癡を闡明せられしが、本誌研究欄に詳きを以て此には紹介を略すべし。終りて一時間休憩を宣し、會員一同の會食をなすこと例の如く午後七時廿分に至りて再會、清原文學士は辯才天の信仰について、神道に及ぼしたる佛教の影響として辯才天は比較的遅れて信ぜられしも、今は全國に普及せり、始め音楽、智識の神とせられ次で財の神、辯の神、武運の神とせられ清盛は財の神として之を信仰したりしが此頃より辯才天は辯財天とせらるゝに至り、吉祥火と混同したる傾もあり、七福神の一として信仰は徳川時代の初期以來の事なるべしと説き、今西文學士は日本と新羅との年代の比較に就て年表を抄録せる刊物を來應者一同に頒布して説明を加へ

比較研究について注意を述べられ、喜田博士は土俗より見たる我國古代の民族について、古代の日本民族を研究する數多の方法のうち、主として土俗上より古代日本民族が如何なるものなりしかの參考に資せんがため、「罽」及「罽蓋」の事を述べられ、天孫種族は罽を用ふるな事くこれに反して華人及夷の如きは之を使用せり次に罽は南洋方面に使用せられ「イオリ」系統に屬す、釜は「カマド」系統にして朝鮮邊にて使用せられ朝鮮方面を経て來れりと思はる天孫民族も亦之を使用せり、この一事を以て天孫民族の由來を云ふべきに非ざれども古代民族の研究にはかかる方面にも注意すべき必要ありと説かれ、内田博士は夷大黒について、主として其研究法を述べられ、夷に就ては從來種々の研究發表ありしが其研究を要すべき餘項は夷神の本來は如何、現今の性質如何、其間の變遷、専ら商家の信仰する由來、夷神の地理上の分布等あるべし、余の考を以てすれば、夷神は最始獲物の神として漁夫の間に祭られ次で航海の神となり更に利益の神となりて今日の如き信仰を得るに至りしに非るか。大黒天に就ては、印度本來の大黒天は如何、日本に於ける大黒天は如何、果して外來の神か固有の神か等を研究する要あるべしとて、上田氏、石橋氏の説を引き、其本來印度のものが我國に入りて非常に日本化したりと思はるゝを説かれ、最後に福の意味に就て一言せられたり。牧君の閉會の辭ありて散會せり、時に午後十時。當日は荒木總長を始め桑原、坂口、新村、藤井(乙)、藤井(徳)、新城の諸教授を始め日蓮宗各本出貫主等百餘名の來會者ありき。

當日の陳列品は之を第一部、第二部に分ち、第一部は主として今更

三浦博士によりて採訪されたる日蓮宗各本山の史料、第二部に於ては朝鮮史料を陳列する事とせり、第一部第一區には上流の信仰を示すべきものとして近衛房嗣の筆になれる法華物語、房嗣を始め尚通、信尹、家照の法華經に關する和歌、種家筆の法華和語記、一條兼良及空真の法華要品傳授の證明、徳川賴宣の母養殊院及徳川光國の書狀、永祿天正間に於ける京都の豪商渡邊淨慶夫妻の畫像、降屋祐右衛門の甲斐に往來し、武田勝頼の信任を得て勢力ありし事實を證すべき日蓮上人遺骨傳來記も亦其中にあり、第二區は法華神道に關するものにして番神問答、吉田兼俱書狀を始めとして兼見より頂妙寺日院に對する神道深秘傳及神道私抄等あり、

第三區は畫像及著書にして日朗の畫像、筆蹟、日像の畫像及其日本國の法華宗云々の文ある書狀、日親畫像及其立正治國論、説法石傳來記録、日意の畫像及其文句、日量畫像及其の摩訶止觀は法なるものなり、第四區筆蹟には日通の中由法華經寺に於て寫せる日蓮遺文寫目錄及其難字解を始めとして、慈鎮定家兩筆本能寺切、寛性法親王消息、世尊寺行房筆入木抄等あり、第五區文藝には秀吉連歌卷を始めとして松永貞徳の畫像及其三ツ物あり三ツ物卷は三ツ物の起原に就て文學史の定説を修正すべく長谷川等伯の畫談を記せる畫説は美術史を補ふべきものなり、立本寺過去帳には佐野紹益夫妻の没年を詳かにし、本因坊第一世日海の畫像、同第二世算篋の圍碁大意は池坊專榮の弘治元年花傳書と共に珍とすべし、第六區雜の部に於て信長の本能寺を定宿として餘人の寄宿を禁止せる禁制秀吉が蒲生氏郷没後の家政を慮れる朱印、藤堂高虎の加藤清正の遺物なる深山茶壺を本園寺に寄附して佛前獻茶の事を約せる

書狀及日性の豐臣秀頼の保護によりて空運の隆昌を希へる遺言狀等あり、第二部に於ては李朝實錄の寫真を始めとして紀事、欄後、日記(鄭元容等自筆の日記を含む)疏劄等の關係圖書に史庫の寫真をも添へて李朝に於ける實錄編纂及保存の狀態を述べしめ、なほ鄭道傳、金時習等の畫像等を陳列せり、其中、明倪謙奉使唱和詩卷一卷は羅振玉氏の所藏に係り倪謙及朝鮮の鄭麟趾、申叔舟、成三問の自筆を收めたるものにして、何れも希觀の書に屬し、一段の光彩を放てり。

支那學會

例會 九月十九日午後六時より文科大學第九教室に於て本學年第一回の例會開催、會する者狩野、内藤兩博士、矢野、羽田、今西各學士、富岡講師等學士學生客員四十餘名なりき、當日の講演左の如し。

一、護符に現れたる一種の異字を推論す

文學士 那波 利貞氏

二、支那旅行談

文學博士 高瀬武次郎氏

高瀬教授先づ登壇旅行中の一節として日記を繰り廣げて廬山發出の部を詳細に紹介せられたるは同博士が刻せられたる題銘を掲げて追憶談ありき題銘左の如し。

大正二年五月二十四日返江西。祭周元公墓於栗樹嶺。二十五日登廬山。二十六日拜邵康節朱文公遺像於白鹿洞。二十七日謁王右軍神位於歸宗寺。醉陶甌節於柴桑里。二十八日返廬山牯牛嶺。二十九日遊東林寺。訪慧遠遺蹟。此六子者千古得道之偉人而廬

由實天下之大觀矣。僅以六日得悉之幸奈於是乎可知也。

次に那渡文學士は概括強固なる一種の謔符を紹介し之が乘艘錄、提醒紀談等の書に見わたるを述べ其の流行の由來を説き東洋に於ける漢字以外の異體の文字にして而も漢文に模倣して作成したる異字を述べ悉くは道教の謔符ならむも、Chiaoの研究せる女眞文字の解釋に従へば或は女眞文字とも解し得んかき述べたり。

大會 十一月廿八日第二回大會を公開す、時恰も伊藤東涯先生に御贈位の事ありて伊藤家の報告祭日に相當せしより、此の記念の意味をも含めて、記念講演を聞く。此の日東涯先生の自筆になりし伊藤家門外不出の稿本類五十餘種の展觀あり、午後よりは内田博士の好意により通書管見、新刊用字格、古學先生稿銘行狀、閑教餘錄等六部の出陳あり、紀州の垂井清右衛門氏又特に入浴し、東涯先生自筆の横卷額面などを出陳せらるゝあり、會場は大學々生集會場階上にて、正面には仁齋先生の筆になれる「至聖先師孔子」と東涯先生の「大成至聖文宣王」の軸をかけ、左右に岡先生の肖像を掲げ、又壁間には二等院なる紹述先生稿銘の拓本を掲げたり。

午前九時より開會、先づ文學士岡崎丈夫氏は「支那に於ける學校制の起原」に就て述べられ、文學士佐賀東周氏は「看過せられたる支那文學の一面」と題し日本に於ける四六文に就て述ぶる所あり、奈良朝には殊に四六文流行し萬葉集の歌序すら立派なる四六文なるに足利時代に至りては五山十刹の疏にのみ殘るに過ぎざりし事を述べらる、次で文學博士内藤教授は陳列品の説明として東涯先生の史學に對する見識を紹介し殊に朝鮮研究に熱心なりし由を一實例をあげて示し藏書中の漢韓兩語對譯の字書として最古なる

訓靈字會に就て紹介せられ更に梅宇先生と鮮人成夢其との筆談に言及す、次で會員一同の午餐會あり午後一時文學博士狩野教授は亦說明の一部として仁齋東涯岡崎三先生の經學に對する見解を述べられ岡崎先生の殊に宗學のみに重きを置かすして自己の見識を立てたるを紹介せらる、文學博士高瀬教授は「堀川學派と徂徠學派」なる題下に兩學派を比較し岡派は猶ほ支那に於ける孟子と荀子との關係に似て堀川派及び孟子は常に獨立の位置にあるも徂徠派及荀子は常に反抗的態度を取りし事を懇々として述べらる、次で文學士鈴木助教は「四六文の話」として隋唐を中心として四六文に關する深き研究の結果を公にせられ、文學士吉田增藏氏は「説文に就いて」と題し説文の文字の排列の玉篇に比し遂に非學術的なるを指摘せられ説文研究と金石文研究との密接なる關係を説かれ、幾多の例を示して氏が研鑽の餘に成れる文字構成の解釋を示さる、最後に文學博士桑原教授は「支那人の保守思想」なる演題にて支那人が保守氣質ある所以を述べ種々の例證をあげて最後に西洋文明と支那文明との今後に於て好都合に調和なし得るや否やは蓋し興味ある注目すべき現象ならむ事を指摘して降壇せられ會は茲に終局をつぐ時に午後五時半なり、來會する者荒木總長以下内田、新村、狩野、内藤、桑原の諸博士、羽田、矢野、鈴木各學士、伊藤家一族親戚、紀州の垂井氏、卒業生、在學生、有志篤志家等合計百五十餘名に及べり、陳列品の重なるもの左の如し。

仁齋先生肖像 東涯先生肖像 仁齋先生眞蹟 東涯先生書仁齋先生行狀草本 編者筆談

仁齋先生稿本としては論語古義、孟子古義、童子問、易經古義、和歌

愚艸等東洋先生稿本として制度通、本朝官制沿革圖考、三載紀畧、朝鮮官職考、帝王譜畧、倭漢紀元錄、後漢官制等、岡嶋先生稿本としては易憲章、書反正、詩古言序總論、詩經古言、讀禮記、春秋聖旨序說、朝衣稿等貴重なるもの多く其の外古義堂遺書總目叙釋、古學先生集、初述先生集、經史博論、辨歷錄、天命或問、名物六帖、釋親考、經學文衡、輜軒小錄、盡善錄、鄒魯大旨、語孟字義、唐官鈔等の版本、朝鮮人安鼎福の順菴集(日本學者の條に仁齋先生に就ての評あり)を陳列せり。

西洋史讀書會

十月十八日學生集會所に於て開く、原、坂口兩教授、卒業生及び學生十數名來會す。去る七月發行の *Quarterly Review* 誌上に於ける *Water Ives* 氏所論 *Archandales* に就いて夫久保一峰君の紹介ありたり、其大要左の如し。

由來黑海沿岸の平野並びにダニユープ沿岸一帶の地は、食料品並に原料品の産地なるが故に、黑海貿易は常に食料品並びに原料品に欠乏を感ずる西部歐羅巴諸國民に取りて重要なる關係を有す。而して之が貿易路は地峽上ダーダゲルス海峽を措いて他に求むべからざるを以て、此海峽を閉鎖し得る者は直ちに西歐に要する重要食料品の出て來る喉首を歛め得るに等し。ダーダゲルス海峽は古來、經濟上將た軍略上重要なりしは、常に横の方向よりも縦の方向にありとす。即ち大なる通商貿易路にして海峽を横斷したるは未だ曾て無く、亦海峽は曾て軍略上の防禦線或ひは政治上の境界線として要用なりし事もなかりき。又屢々大規模を以て軍隊が

これを横斷通過せしことあるも皆軍略上の反抗を受けず。かの千三百五十六年土耳其軍のダ峽横斷通過の際に於てすら何等軍略的反抗を受くることなくして之を通過せり、其他有名なる軍隊の通過を擧ぐれば前後二回あり、即ち一は紀元前四百八十年のクセルクセス大王軍の通過にして一は紀元前三百三十四年の歷山大王軍の通過なるが、孰れも如上の事實を證明し居れり。次に海峽の性質を觀るに、海峽の水流は一時間一海里半の平均速度を有し、其最も危険なる場所に於て一時間に約五哩の速度に達することあり

此の流速に對して風の影響する事頗る大なるものあり。風は十二ヶ月間中九ヶ月間は水流の方向即ち北東より吹き來るを以て古代の小船舶は勿論近代の帆船と雖も海峽を通航する事不可能なり、然らば如何にして之を通航するかと云ふに、北東風は朝に起り午に烈しく夕に至りて風ぐを以て常とすれば只僅かに其期間及び海峽沿岸なる無數の岬角によりて形成さる、靜の岸涯に沿ひて逆流する渦を利用して通航するを得るのみ。故にダ海峽は幾分西方に對する防禦的機能を有するなり。而して海峽の支配が諸國民の手に移り行くに伴ひて、其防禦方法にも變遷ありき。其變遷は概略トロイ時代亞丁時代土耳其時代の三大時機に別ち得べく、各時代は其防禦の方法を異にすると共に其防禦の位置をも異にしたり。第一トロイ時代には海峽を受動的支配の下に置かんとする目的より海岸占有を必要とし海峽の入口に於て防禦は施され、第二亞丁時代に於ては海峽の防禦が専ら其海岸に據りしを以て港灣を占有する必要上、防禦の地點も海峽の北端附近なる *Scopos* 並に *Mytilos* の二港に移りたり。第三土耳其時代の防禦方法は火炮に據るにあ

りしを以て全海峽中の最も狹隘なる地點Chanak並にKilitid-bahrの二城砦に置かれたり。

十一月二日午後六時開會、原、坂日兩教授、中村講師及卒業生、學生等十數名參會す。小早川彦一君「申世に於ける自然科學」なる題下に「The Popular Science Monthly」 Sept. 1915 所載 Lynn Thonhite 氏の論文を紹介せらる。其要領次の如し。

申世紀は概し暗黒時代なりし如く考へらる、は誤謬の見解にして其後期に於ては文化の躡るべきもの決して輕からざるなり。此時代既に自然科學の萌芽發育し始め、近世學術の先驅とまではいひ得ずとも、其性質に於て近代的なるもの存在したりしなり。自然科學に對する興味を有すること深甚なる點に於て、スコラ學派の人々は却て伊太利の文藝復興時代に於けるフマニストよりも優越せり。通常最初の近代人はペトラルカなりとすれど、吾人は更に氏以前の時代に遡りて近代人を求めざるべからず、そはペトラルカにあらでアペラードなり、否アペラードにあらで、更に遡りてアテラードを推さざるべからざるべし。實に申世人士は一方には希臘や羅馬やアラビヤより傳來せる因習を排し迷信を斥くると共に、アリストートル、ガレンス、プリニウス、トレミー等の價值ある學說を採るに務めつ、他方には自然及び自然に關する問題に興味を有せり。彼等は科學と宗教との間に區別を存せしめ、數學地理學、物理學、化學などに實驗的方法を採用して、夫々進歩の跡を示し、後代に於ける科學の進歩に貢獻する所餘からざるものありき。然しながら當時の科學研究の方法に多くの缺點ありしは云ふ迄もなく、輕信の如きは殊に著しき瑕疵なりき。

十二月一日開會、牧健二氏「The Nineteenth Century and After」七月號所載の Ellis Parker 氏 論文「The Secret of Germany's Success」を紹介せらる。其要旨左の如し。

獨逸が示せる今日の優勢偉力は、國家に規律あるに基く。即ち獨逸には、プロシヤ建國の際にあたり、大選舉侯フレデリック、ウイリアム、王フレデリック一世及び特にフレデリック大王なる三名主權繼ぎて立ち、其間に樹立せられたる軍國主義、獨裁政治官僚政治に依り、強固なる國家組織成立したり。而してこの國家組織は、各主權者の率先實行して範を國民官吏に垂れたる「國家に對する自己の責任」てふ強烈なる義務的觀念に依りて、成立し維持せられ、益々其強固の度を加へ、斯くて國民は何人も皆、君主の意圖のまゝに左右せらるべく訓練せられたり。茲に於て乎、獨逸に於ける各般の國家生活乃至人事の交渉には、總て整然たる規律の存するを見るに至れり。即ちこの規律は國民の私事にも公務にも現はれ、この規律こそ獨逸が戰爭に強き根本原因たるなれ。獨逸國民は元來この規律を有せし民族にあらず、この優秀なる民性は全くプロシヤ建國以來の歴史に壓服せるものにして、斷じて一朝一夕の産物に非らざるなり。この民性陶冶に殊功ありしはフレデリック大王にして、大王はその持論たる君主制優劣論並に君主の義務に關する遺書を作れり。こは歴代のプロシヤ王の遵奉する所にして、公ピスマルクは大王遺教の大なる後繼者なり。英國共和制の特質たる放縱は個人の仕事たる戰爭に適合せず、獨逸を破らんには、須く戰時中獨逸の如き專制的國家の組織を採用し、この強敵に拮抗せざるべからざるなり。

地理學研究會

九月二十七日談話會、午後六時より學生集會場に於て開催、出席者小川、喜田兩博士、會員内田、遠藤、下田、伏見、梅原、田中、小川教授は先づ新刊の地質要報第二十五號（ハ爾支那地方の地質）Oxford Survey of the British Empire, Cambridge County Geographies 及 Idlings, The Problem of Volcanism 等數冊の和洋圖書を紹介し、各其内容特徴等を説明せられ、次に内田學士は南洋研究の參考書を解説し、一々書籍を紹介したり。

喜田博士は今夏試みられし奥羽地方及び北海道の視察談をなして陸奥二戸郡仁左平、上斗米地方と北海道の白老、余市のアイヌ部落とを種々の點より比較し、後者は何れも新開地に接し内地人と雜居し、前者に比して却て文化の進歩著しく、今より數年の後には北海道のアイヌは或は奥羽の保守的の地方を凌駕するに至らんと結ばれ、終りに同地方のタテ（又はマチ）及び家屋のプランを附説せられたるが、之に就きては小川博士、梅原氏等も各地にて見聞せる所を述べ他の會員亦それぞれ、知れる所を以て之に和し、大いに論究する所あり、かくて最後に小川教授は今夏七月江州旅行の際の調査の一端として五箇莊、能登川地方の運河の發達、湖水の利用及同地方一帶の條理の制等に就き畧述せられたり、十時散會。

十月十一日叡山發り、郊外の地形視察及氣象觀測演習を主目的とし、小川教授を始め、内田伏見大塚等八時山端に集合、雲母阪より四明嶽に上り、山頂にて氣溫氣壓等を觀測し、延曆寺前の力餅屋に少憩の後、一乗寺に下り、五時歸洛したり。

十月十二日講讀會、午後六時地理學研究室にて開會。出席者小川教授、内田、下田、勝田、伏見、大塚、田中。席上勝田君は倫敦地學雜誌所載の Canada なる Georgian Ship Canal に就き其運河地域の地形より始め、其設計、開鑿の難易、工費、開通後經濟上に及ぼす影響等を詳説し、下田君は同誌の Arthur Holmes, Alexander Wray 兩氏の探究に係る Mozambique の地形に關する研究を紹介し、特に同地方の高原上處々に孤立せるドーム狀の突出所謂 Insular の成因を詳説せしは興味深かりき、講讀後小川教授を始め、會員の質問等あり。九時散會。

十月二十二日若倉行、會員内田、田中は昨年來本會が着手したる落北大原若倉一帯の地調調査事業の繼續として、午後十一時より夜を徹して若倉村石座神社の祭禮を調査し、翌朝七時歸學したり。

十月二十六日談話會、午後六時より學生集會場にて開會。出席者小川教授、比企助教以下内田、下田、勝田、大塚、田中。小川教授は武裝せる地理學界なる題下に、大正三年八月歐洲戰亂勃發以來歐羅巴各國の地理學界が之が影響を被りて、如何に戰爭的色彩を帯び來れるかを最近列國の地理學雜誌に就きて述べられたり。詳細は教授が本誌の叢說欄に掲げられたるが如し。次に大塚君は大正三年一月の櫻島噴火の實況を寫眞及標本等を示しつつ、談らる。同君は當時鹿兒島師範にあり、噴火の初發以來居ながら目撃經驗せられしものなれば、其當時の狀況は目のあたり見るが如く、說話眞に迫り、聞くものをして血湧き肉躍るの感あらじめたり、りて會員の質問あり。殊に比企助教の噴火に關する興味ある實驗談あり。九時半散會。

十一月二十一日鞍馬行、内田學士は本會實地踏査部の事業を分擔して洛北鞍馬神社に行き、有名なる同社の火祭に關する調査を行へり。高野八瀨大原を始め、洛北地方の研究は尙繼續中に屬するものなるが、完成の上は機を見て發表する計畫なりといふ。

京都史蹟會概況

京都史蹟會は京都に關する歴史を闡明し地方人士の社會に貫徹せる事蹟及び事物を保存し、顯揚するの趣意を以て子爵清岡長言氏を會長として大正二年三月創立したるものなり。

本會の事業としては大正二年六月以來六回の講演會をはじめとし大典資料展覽會、御所沿革史料展覽會、和歌燈册展覽會、皇陵巡拜會を開催し、書籍及び雜誌を刊行せり。大正四年八月には御大禮記念事業として京都市立高等女學校に於て七日間講習會を開き聽講者百數十名にて左の講演ありたり。

- 一、京都の文化
- 一、京都に於ける主なる史料
- 一、洛中洛外の主なる史蹟
- 一、京都民間歳事史
- 一、京都に於ける特種風俗
- 一、京都物産史
- 一、京都に於ける特種古建築物
- 一、京都の美術工藝
- 一、近世に於ける京都の教化
- 一、近世歌人と岡崎村

- 三浦博士
- 三浦博士
- 増澤氏
- 江馬文學士
- 江馬文學士
- 江馬文學士
- 確井氏
- 武田博士
- 中井文學士
- 魚澄文學士
- 林文學士

- 一、醜醜に就て
- 一、宇治と茶
- 猪熊氏

右の外北野神社、平野神社、金剛寺、大徳寺、東寺、西本願寺、太秦廣隆寺に就て實地指導を行へり。

尙本會は設立以來比較的多くの事業を遂行したるも將來更に活動の準備として基本金募集の事につき目下協議中なり。(幹事西村喜一郎氏報)

丹波史談會概況

丹波史談會は丹波の史料を蒐集し、史蹟を明にし之が保存の途をはかり、史學思想の普及を圖るの趣意をなし、明治四十五年一月創設したるものにして近藤九一郎氏を理事長をなし、九鬼隆一男、三浦周行博士、三上參次博士、三宅米吉博士を名譽顧問とす。明治四十五年二月水上郡實科高等女學校内に於て發會式及び第一回總會を開き、西村時彦氏、福原潛次郎氏後醜醜正六氏の講演あり、又別に同日第一回史料展覽會を開けり、爾來數回野外調査に従ひ古墳の探究、神社佛寺等の歴訪を行ひ、大正元年十一月大嘗祭主基方齋田に關する丹波の史實を調査し當局に建議する所ありたり。大正二年八月第二回總會を開き京都文科大學教授三浦博士を聘して講演會を催し同日別に史料展覽會を開き、大正三年十一月第三回總會には千家尊福男の講演ありたり、大正三年二月大典記念事業として水上郡史編纂の企圖をなし、御即位式延期の爲め一時中止せしが大正四年十一月再び編纂に着手し今尙從事中なり(近藤九一郎氏報)

池田史談會概況

攝津國豐能郡池田町はもと吳服の里と稱して吳織、漢織の舊蹟を存し戰國時代には荒木、池田氏の居城あり、牡丹花宵栢、田中桐江を初め近くは廣瀬旭莊の遺蹟今尙存して研究すべき史蹟少からざれば、去る大正三年十一月十四日素封家稻東芝馬太郎氏外八名發起の下に池田史談會を設立し池田町を中心として其附近の歴史地理を研究するを以て目的とし爾來毎月一回第二日曜を以て池田師範學校内に於て開會し來れり、本年十一月まで例會を開く事十九回、此間郷土資料展覽會を催す事二回、會員は現今會長池田師範學校長山岡光太郎氏外十二名、少數なりと雖も熱心なる研究家の團結なり。今例會に上りたる講演題目申重なるものを掲ぐ。

一、猪名研究——猪名の起原並其住民及び古代法より

見たる猪名の政務官に就て

荒木藤一郎

一、日本春秋の著者僧日初に就て

同 氏

一、天神森(一名荒城の杜)に就て

同 氏

一、本邦城郭の沿革を論じて池田城に及ぶ

岡部常次郎

一、池田附近の地名に就て

同 氏

一、戰國時代に於ける池田群雄の變遷

海老原末吉

一、牡丹宵栢の著書に就て

吉田 鏡雄

一、田中桐江傳

同 氏

一、廣瀬旭莊の池田寓居

同 氏

(吉田鏡雄氏報)

我が學界に縁故淺からず Dr. Ludwig Riess 氏は、昨年二月日々ハリン史學協會(Die Historische Gesellschaft zu Berlin) 於て「現代日本の發展」(Die Entwicklung des Moderne Japans)と題する講演をなせり。今、同會の報告記事に據りて其の論旨の概要を觀るに、氏は先づ現代日本の偉大なる發展を能ならしめたる要因は一、武士階級の保有せし尚武的精神、二、川期に於ける文化の隆昌、三、一七五〇以來勃興したるロマンツク運動にありとせり。次に氏は開國以來今日に至る國家的社會的文化的進歩の現代史を五期に區劃し居れり。即ち第一期一八四一—一八六八年(安政元—明治元)に於て外強壓迫の間に王政復古を就し國民的結束を鞏固にしたる國家は第二期一八六八年より九年(明治元—一三)に亘り中央集權制の下に歐文明の同化に勉め一八九〇—一九〇一年(明治二三—三四)の第三期に至り、遂に約改正、民法制定により文明諸國と對等の位置に進み、同時に亞の對手國たる支那を壓服せしめたり。第四期一九〇一—一三(明治三四—四四)に及びて、日本は世界列強の班に入り、英と同盟、對露戰役の勝利、次で佛露との協力は、その東亞に於ける優越の地位を確實ならしめたり。而も戰後に於ける財政上國民經濟上の憂慮、移民の難問題は湧起せしが、産業化せる日本に對て支那及び南洋は最も反抗少き膨脹方面たるなり。一九一一年後の第五期に於て、日本は歐洲内部の紛争に際し、革命期の支那を壓迫し、世界的戰役に參加して正に其の史的發展の新時代を拓きつゝあるなりと。

同じく五月七日該協會に於ては Dagon Fritschewicz 氏

歐米史界

第一卷

(一六)

彙報

池田史談會概況

歐米史界

第一號

一八五

“Japans wirtschaftliche Entwicklung um die Wende des 19. und 20. Jahrhunderts.”なる講演ありし由なり。氏は主として新日本の貨幣政策、移民政策を論述せしもの、如し。吾人は現代日本の史的研究が彼地學界の注意を喚起しつゝあるを想察すべきなり。

近時獨逸に於ける知名史家の訃報屢々傳へらるゝ。斯學の爲痛惜すべき也。古代史家の重鎮 Pohnmann 氏、文化史派の泰斗 Lamprecht 氏の二顆星を失はるゝの報に接せし吾人は、更に固もなくハイエルン學士院長 Karl theodor von Heigel 氏及びヘルリン史學協會の名誉會長 Ferdinand Hirsch 氏の逝去を聞くノゾクはなれり。

Heigel 氏は一八四二年八月廿三日 Altmöhen に生る。一八七三年同市大學に歴史の講師たり、一八七九年員外教授に進み、一八八五年正教授に任ぜられ、一九〇四年學士院長となる。昨年三月廿三日永眠す。享年七十二。氏の著述については有名な “Deutsche Geschichte vom Tode Friedrichs des Grossen bis zur Auflösung des alten Reichs” (Stuttgart, 1893, 4 2 Bde.) を初め其の主要なるものあり。

Das Herzogtum Bayern zur Zeit Heinrichs des Löwen und Otos von Wittelsbach (Stuttgart, 1867); Ludwig I. König von Bayern (Leipzig, 1873); Der österreichische Erfolgsstreit und die Kaiserwahl Karls VII (Nördlingen, 1877); Die deutschen Kaiser (Stuttgart, 1880) Die Wittelsbacher (München, 1880); Aus drei Jahrhunderten (Wien, 1881); Münchens Geschichte 1158-1806 (München

1882); Neue historische Vorträge und Aufsätze (Jahrg. 1883); Quellen und Abhandlungen zur neueren Geschichte Bayerns (Jahrg. 1884, Neue Folge, 1890); Essays aus neuerer Geschichte (Hamb. 1892); Geschichtliche Hilde und Skizzen (München, 1897); Neue Geschichtliche Essays (München, 1902); Politische Hauptströmungen in Europa im 19. Jahrhundert (Leipzig, 1911).

Hirsch 氏は一八四三年四月廿二日 Danzig に生る。史家 Jacob Hirsch の息なり。長じて Göttingen, Berlin に學ぶ。一八六七以來 Königsbühliche Realgymnasium zu Berlin の教師たり。一八七二年同志と共にヘルリン史學協會を創設し、七八年より會に於て Abtheilungen aus der historischen Literatur を發行。斯界に眞識する所多し。一八八三—一九一一年該協會の會長り、後これを辭するや同會より名誉會長に推せられたが、昨三月三十日宿病癒せずして終に長逝す。氏は東羅馬帝國の歴史造詣深べ、”Byzantinischen Studien“ (Berl. 1876) の著あり。Vahresberichte der Geschichtswissenschaft に於て常にロザン帝國の部を擔當し居れり。一八八一年以後父の遺業を繼ぎ、urkunden und Aktenstücke zur Geschichte des Karlfürst Friedrich Wilhelm von Brandenburg (XI, XII, XVIII, XIX) を公刊す。其の功勞偉かつやく。従つてハンヌマンノ大選候に關する論著の公にせられたるもの甚だ多し。今前掲の著書に重なる述作を擧ぐれば次の如し。

De Italiae inferioris Annalibus. (Berl. 1864); Herzogtum zu

Benevent bis zum Untergang des Langobarden Reichs,
(Leipzig, 1871); Die ersten Anknüpfungen zwischen
Brandenburg und Russland unter dem Grossen Kurfürsten
(1885, 6 2 Bde.); Der Winterfeldzug im Preussen 1678-
1679 (Berl. 1897); Brandenburg und England 1674-1679
(1898, 9 2 The.); Zur Geschichte der polnischen
Königswahl (1901).

近著の Amer. Hist. Rev. は又 Heinrich Tanner 氏の評を傳へ、
氏や専門史家たるものも、吾人申世史研究者に於りて氏の名著「
獨逸法制史」がいかなる莫大なる恩恵を興へつゝあるかは、今更
是處に唯々するの要なかるべし。氏が根本史料を基礎とせるマル
マニ法制史の建設は實に學界の一偉觀に於て、申世の法制經濟上
の諸問題に關する氏の學説は、確かに斯界に於ける最高權威の一
たるを失はざるなり。

Tanner 氏は一八四〇年六月廿二日上ガーストリアの Wels に生
る。Wien, Göttingen, Berlin の各地に學び、一八六五年 Lemberg
大學の講師となる、翌年員外教授たり、次で六八年正教授に進む
一八七〇年 Prag に轉じ、七二年更に Strassburg に赴任せしが、
翌年遂にベルリン大學の法科教授となる。一八八四年以來普玉室
學士院の會員たり、又 Monumenta Germaniae historica の
Zentraldirektion をこつ、將た Zeitschrift der Savigny-Stiftung
für Rechtsgesch. Germaniens 部の編纂擔任者として、法制史研究上
に寄與する所實に多大なり。昨年八月十二日 Kissingen に於て長
逝す、享年七十六。今左に主要なる著書を擧げん。

Zengen und Inquisitionsbeweis der Karolingischen Zeit
(Wien, 1866); Das Anglo-Normannische Erbschaftssystem
(Leipzig, 1869); Das Gerichtswesen und die französische
Königskunde (Berl. 1873); Die Entstehung der Schwur-
gerichte (Berl. 1872); Mithio und Sperantes (Berl. 1885);
Zur Rechtsgeschichte der römischen und germanischen
Urkunde (Berl. 1886); Deutsche Rechtsgeschichte (Leipzig,
1887, 92, 2 Bde. 2. A. 1906) Der Lehzwang in der
deutschen Agrargeschichte. (Berl. 1897) Forschungen
zur Geschichte des deutschen und französischen Rechts
(Stuttgart, 1904) Grundzüge der deutschen Rechtsgeschichte
(Leipzig, 1901) Über ein verschollenes Merowingisches
Königsgesetz des 7. Jahrhunderts (Berl. 1901); Geschichte
der englischen Rechtsquellen im Grundriss (1909).

アメリカ史學協會 (American Historical Association) の主催
にて昨夏桑港に開かれたるバナマ太平洋史學大會は、我國より代
表者として外國語學校長村上直次郎氏を派遣せしを以て殊に世人
の注意を惹きし所なるが、近著 Amer. Hist. Rev. は同會に就
て詳細なる記事を掲載し居れるを以て、これにより其際發表せら
れたる主なる研究を左に列擧すべし。

太平洋上に於ける歐洲諸國民の争闘 H. Morse Stephens.
西班牙と太平洋 Don Rafael Alvarania Y. Grever.
カリフォルニアの歴史 John F. Davis.
亞米利加運河に就て Rudolph T. Taussig.

ヨーロッパに於ける Ecclesiastical Visitation の問題

Charles H. Cunningham.

西班牙及び合衆國治下のフイリッピン總督

David Q. Barrows.

米洲西北部發展の動因としての毛皮商業

F. W. Howay.

露領米洲に對する露政府の態度

Frank A. Golder.

米洲西北部地方に於ける水路の發達

Clarence B. Bagley.

オレゴン史の決定的要素としての太平洋

Joseph Schafer.

教父 Eusebio Kino の傳記及びメキシコ傳道

Herbert E. Bolton.

New Spain に於ける Joseph Galvez の改革

Herbert J. Priestley.

メキシコに於ける英の勢力及びこれに對する poinsett の反折

William R. Manning.

一八六一年の Home League に就くべの回想

Haraca Davis.

米洲西南部地方に於ける米國の毛皮商業

Thomas M. Marshall.

Oremia の New Mexico 再征失敗の原因

Charles W. Hackett.

初期に於ける日墨關係

N. Murakami.

初期に於ける日本の佛教信仰

K. Asakawa.

(刊一)

(植村)

會報

例會は大正四年十月十六日(土曜)午後一時半より文科大学第八教室に於てを開けり(彙報欄参照)

第八回總會

同十二月五日午後一時より京都帝國大學學生集會場に於て本會第八回總會を開催す。會務報告に次いで評議員の改選あり。其結果羽田亨、原勝郎、富岡謙藏、小川琢治、内藤虎次郎、桑原臨藏、坂日昂、喜田貞吉、三浦周行、新村出の十君當選せらる。終りて階上に講演會を開ぐ、其詳細は彙報欄に載せたり。講演終了後夕刻より階下食堂に有志晚餐會を催し九時過散會(爾後羽田亨君は評議員を辭任せられしを以て、次點者中村善太郎君當選せられたり)

史學研究會講演集

本會は創立以來隨時講演集を發行し後史的研究を改題せり。今本誌の發刊を機として其目次を左に掲ぐ。

第一冊 明治四十一年九月

平等院の裝飾模樣に就きて 工學博士 武田 五一
徳川時代の大阪市制 文學士 幸田 成友

第二冊 明治四十二年九月

宋學傳來の淵源 西村 時彦
長白山附近の地勢及び松花江水源附完顔城址考
理學博士 小川 琢治
東洋史の研究に就きて 伯 鼈 大谷 光端